

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.20)

### 「朝に葉巻、夕には水もなし」

・・・栄枯盛衰、世のならい・・・

世の中の進歩や時間が過ぎ去っていくのは猛烈に速く、日本よりゆっくりと生活しているように見えるメキシコでも、その流れは実感させられる。そんな中で、過日の日本の衆議院議員選挙結果について書けば、「いささか旧聞に属するが」などの、枕詞を書き加えなければならないほど、今では別の世界へ移行しているだろうけれど、当地の事情と関連づけてあえて報告してしまおう。

新聞のすべてに目を通してはいるわけではないので断定しかねるが、日本に関しては、経済記事が時々載る程度で余り報道されない。最近では、首相の「貧乏人は結婚すべきではない」と、取られかねない発言記事が掲載されたが、中南米のなかでは日本とメキシコは、比較的緊密度が高いはずだし、特に今年は、日墨交流400周年の年に当たるので、余り記事が少ないといささか寂しさを感じてしまう。

政治欄に関しては特にその感を受ける。前回の派遣でメキシコに滞在していたとき、安倍、福田内閣誕生の出来事があったが、新聞にはあまり取り上げられなかった記憶がある。2005年9月の、いわゆる郵政選挙で政権与党が圧勝して以来、1年ごとの首相交代では話題性に欠けたからだろう。

それと比較すると、今回の選挙結果の報道は破格の取り上げ方で、いつも購入している、当地の主要新聞に、今回の民主党の圧勝を受けた結果については、世界ニュース欄には約半ページ、社会欄にも鳩山氏の出自と鳩山婦人に関する記事が約半ページと、また街角で配布している無料のミニコミ紙にも、カラー写真入で記事が掲載されていた。

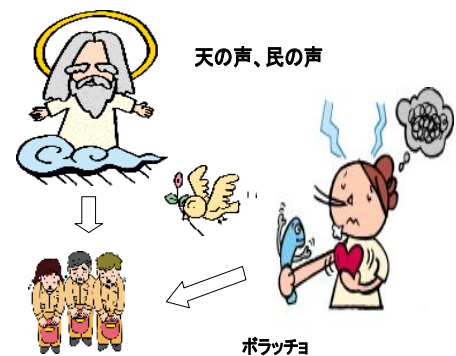
選挙結果はメキシコにとって、日本の動向を見る上で、少しは注目されたことの証拠と言えようか。記事の内容とえば、自民党の敗北要因と、さらにはアメリカとの関係について、日本のマスコミと似たりよったりの論調であった。

日本でもマスコミなどでは、政権与党による永年の統治が、国民に飽きられたからだと言うような主張をする人がいるが、本質は前回の選挙以来、実態のわからないまま、「郵政改革」と「構造改革」の名の元に、バラ色の世界が訪れると思われたのに、実際は、社会、経済への国民の「絶望感」に近い危機的な感情を抱かせた、逆の諸現象が起きたことへの反発の方が大きかったのではなかろうか。

いわば、天の声、民の声の力が働いたと思っている。政治の世界と無縁のボラッチョ・ボニート氏であるので、これ以上のことは分からないし、本報告はそんなことを述べるつもりではないので、「物言わぬは腹ふくるるわざなり」と、「徒然草」の作者、兼好法師さんは言っているが、口にチャックをしてしまおう。

政治の世界の混迷さと厳しさを考えていたら、

「A la mañana puro y a la tarde sin agua」(ア ラ マニャーナ プーロ イ ア ラ タルデ シン アグア



と発音し、直訳はタイトルのとおりである。意味は朝、葉巻を吸った人が、夕方には、普通のタバコどころか水も無いという、哀れを催す諺である)と言うのを思い出し、さらに発展して、「平家物語」の冒頭の一説が想起させられた。

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす

おごれる人も久しからず ただ春の世の夢のごとし たけき者も遂には滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ」

多分平安末期の頃の貴族社会から、武家社会になる変革の時代に書かれたと思うのだが、現在の政権交代の世相にも通用するような書き出しで、今回の選挙で身に沁みて実感している人もいることだろう。

話に戻ろう。朝、選挙結果が載っている新聞に目を通していたら、配属先のある上司から、突如「おめでとう」と言われた。一瞬何のことか分からなかったが、話してみるとこの選挙結果のことであった。

どう返事をしているのか躊躇してしまったが、考えてみると今回と似た政権交代現象は、当地では2000年の大統領選挙でおきていたのである。

メキシコでは、1929年以降、強力な与党PRI(制度的革命党)による一党支配が続いていたが、2000年7月の大統領選で、変革を訴えた右派野党PAN(国民行動党)の候補が勝利し、71年に亘るPRI政権に終止符をうち、2006年の選挙でも引き続き、同党の候補が当選している。

現在の、カルデロン大統領の外政面を見ると、米国との関係を最重視しつつ、中南米諸国との関係再構築・強化を重視する姿勢を示している。伝統的な「中立・不干渉主義」から一歩踏みだし、「責任ある外交」をスローガンに、国際場裡におけるメキシコのプレゼンスを拡大し、積極外交を展開する姿勢を示している。

上記の中南米諸国を、アジア諸国と書き改めれば、なにやら日本のこれから進むべき姿を暗示しているようにも見える。過日の下院選挙の敗退、さらに過日当地でも内閣改造が行なわれたが、2006年の政権発足以来、大臣の変わった数は少ない。

これらの結果を見ると、政治の世界では、残念な考えだが、むしろ日本よりメキシコのほうが進んでいるようにも思えてくる。(2009年9月13日、今週も大学での、1日5時間、3日間の講義を終えほっと安堵の気持ちで書きました)



当地の新聞に載った写真の一部